

## 明治の青春—岩波茂雄・安倍能成・中勘助の野尻湖—

市川浩昭

### はじめに——藤村操の死、その衝撃——

明治36年5月22日、第一高等学校生、藤村操は「巖頭之感」を残し、日光華嚴ノ滝に投身自殺をした。数え年で18歳という、ほんの短い命だった。

#### 巖頭之感

悠々たる哉天壤、遼々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからむとす。ホレーショの哲学、竟に何等のオーソリティーを値するものぞ。万有の真相は唯だ一言にして悉す。曰く「不可解」。我この恨を懐て煩悶終に死を決するに至る。既に巖頭に立つに及んで胸中何等の不安あるなし。始めて知る大なる悲観は大なる樂觀に一致するを。このあまりにも有名な辞世の一文は、当時のマスコミを通じて様々に伝えられたようだが、その哲学的な内容とともに、藤村をめぐる失恋の問題なども取り沙汰されたい。しかし当時の青年層に大きな衝撃を与え、その影響は大きかった。

昭和61年7月1日の朝日新聞夕刊、ならびに同年7月11日号「週刊朝日」誌上に、藤村の自殺の原因が失恋にあることを裏付けられる記事が掲載された。その内容は、藤村が自殺当日の朝、一つ年上の馬島千代という女性に手紙と高山樗牛著「滝口入道」を手渡したというものである。手紙には「滝口入道」本文に引いた傍線部分を読んでもらうように書いてあった。さらに本の余白部分には、次のような書き込みがあった。

そは色ぞかし、恋にはあらず／色は花よ、／無情の嵐に散りもせむ、

恋は月よ、真如の光に／春秋のけじめの／あるべしやは（註、／は改行を示す）

藤村は自らの恋を告白し、その代償として死を選んだ。死の原因が失恋という極めて個人的な理由であったという事実は、この時代の青年層を考えるうえで非常に重たい意味があるように思われる。つまり藤村の事件を失恋による死であると断定する、浪漫的判断でとらえる見方ばかりではなく、失恋という極めて個人的な出来事が一人の有為な青年に死を選ばせた、という事実をである。しかも当時の一高生といえばエリートが集められ、い

ずれば社会に出て有為な仕事を成し、成功を取める期待を自身も周囲も抱いていたはずである。そうした前途ある青年が個人的な出来事で死を選んだことに意味があるのではないだろうか。

藤村と一高時代同期だった安倍能成は藤村の自死を同時代的文脈の中でとらえて、次のように記している。(註1)

藤村操の死はたしかに時代的意義を持って居た。日本は明治以来欧米列強の圧迫に囲まれて、富国強兵の一途に進んで来た。一高の籠城主義だとか勤儉尚武だとかいふものも、結局は日本のその趨勢の一波に過ぎなかった。ところが朝鮮問題を中心として日清戦争があっけない勝利に終り、更に十年を経て日露戦争が起こる前後から、国家問題とそれを中心とする立身出世に余念のなかった青年の間に、国家でなく自己を問題にする傾向が起こって来た。高山樗牛は始め日本主義といふ民族主義的国家主義を唱へたが、死ぬる前——彼の死は私の上京した三十五年の十二月であった——病気の為、当時に於いて最上の名誉とされた大学教授になる道に障礙が起こったといふこともきっかけになって、必然自己を問題にせざるを得ぬやうになった。彼の美的生活論やニーチェ讚美や(日蓮讚仰に至っては多少趣を異にするけれども、やはり日蓮の個性、意志の強さを讚美するものであった)は、皆この個人主義的要求の表現でありそれに我々青年も動かされたのであった。「人生果して意義ありや」といふ人生に対する煩悶が、自我の眼ざめて来る青春期に起こって来るのは、自然必然のことであるし、殊に高等学校の年頃に多くの場合始めて経験する恋愛が、当人に於けるが如く理想的抽象的には、大人によって同感せられるはずはなく、真面目な恋愛をする青年の恋が、十中八九失恋に終るといふ実情から、全生命をかけた恋の破綻が、学問とか立身出世とかの青年の大望をおしのけて、生命の自己否定に終るといふことも、非常にプロバブルと見なければならぬ。藤村の死後様々の伝説が生じ藤村の死を失恋に帰する議論も多かったが、私はそれを否定しようとも思はない。藤村が失恋によって死んだとしても、それは藤村の名誉でも不名誉でもないと思ふ私は、むしろその背後にこれがあつたとさへ思ふのである。

当時の青年層が「人生果たして意義ありや」という自己の存在そのものに対しての根本的な問いかけをした時に、人としての生き方の理想と、社会での成功や立身出世を求めて学業を続けている現実を認識したのではないだろうか。しかしこの理想と現実は、矛盾をはらんでいるものであった。またこの時期彼らが出会う矛盾といえば日露戦争があつた。

後に詳しく記すが、安倍は、日清戦争の頃には愛国少年であったと回想するが、この頃には「トルストイの非戦論」にうごかされ、個人主義的な思考に傾斜していた、と回想している。こうした思いも個人的なものである。安倍の言う「国家でなく自己を問題にする傾向」がここにも現れていると言えるのではないだろうか。

自身の内部の矛盾を意識した青年たちにとって藤村の死は象徴的なものであったに違いない。そして現実には自らの身に起こりうべき出来事として意識されていたに違いない。安倍や中勘助、そして藤村と一高の同期入学で、岩波茂雄とも親交のあった山田又吉は、安倍に次のような手紙を送っている。明治37年1月3日付。(註2)

暗黒の魔界に対する毎に故藤村はあらわれて又他の暗黒に導く、かかる折は君したはしく候、小生は健在なり。

また安倍とともに一高の「校友会雑誌」で活躍し、個人主義的な意見を主張した魚住折蘆(本名、影雄 明治36年入学)は、一高入学以前「藤村君とは京北中学で半年以上も席を隣り合せてゐた」が「相容れざること甚だしかった」仲だったようである。(註3)

藤村君とは殆んど此の三四の外に深い交りの歴史はない。然しあの「巖頭の感」はいかばかり僕の心を拊ったであろう。(中略)こまかい事はわからぬが、僕は藤村君の煩悶と僕の煩悶とは甚だ似てゐたものだと思ふ心は今もかはらない。羨しき藤村君の死は僕をして慟哭せしめ悶絶せしめた。僕は生れて以来藤村君の死ほどの悲痛を感じたことはない。僕は死を求めて得ざるに身を倒して泣いた。(中略)けれども藤村君の死は僕にとって非常な事件であつて、僕は断じて人生を空じ去るか、主観の神を客観の祭壇に斎き祀るか、二者の一つを決定すべき機会を藤村君によって与へられたのである。

この頃キリスト者として自己の信仰のあり方に迷っていた魚住に与えた影響を知ることができよう。また明治36年6月に記した手紙に藤村の自死についての感想がある。

先日藤村操君が日光で自殺しましたが、私もあの様な感情に襲はれた事があります。おん身は藤村君の死を何と思ひ遊ばしますか。私は立派な死だと思ひます。私は世の多くの人を見るに何が故に生きて居るのかわかりません。富、金銭、名誉、肉欲のために奔走し、嫉み、恨み、傷つけ、争い、悪み、競ひ、怒り、憤り、嘲り、罵りながら無意味に暮して居ります。私は彼等が生きて居ても死んで居ても別に變りのない人間の様に思ひます。何一つ高尚な希望もなく生を送って憐れなものではありませんか。私は宇宙は何故に在るや、人は何が故に生れたるやと云ふことを考へずに居られませ

ん。私は藤村君の自殺を実に立派な至誠な死だと思ひます。

藤村の自殺の衝撃が当時の青年に与えた影響の一端を伺い知ることができるだろう。自分自身の存在と生き方を模索している青年の姿を、魚住の言葉は語っているのではないだろうか。自らの理想と現実の融和を図ろうとしている青年の姿がここにあるように思う。

自己の矛盾に気付き藤村の自殺に大きな衝撃を受けた存在に岩波茂雄がいる。岩波はその苦悩を取り去るために野尻湖の弁天島にひとりこもる。明治36年7月の事であった。また、安倍能成も明治38年8月、野尻湖に行く。様々な苦悩を抱えその解決を見出そうとするためのものらしい。岩波の野尻湖での体験を知り、岩波の得た心境を安倍自身もまた獲得したいという思いからだったようだ。加えて中勘助も明治44年と翌45年（大正元年）の二夏野尻湖の弁天島にひとりこもる。やはり岩波や安倍と同様自己自身の問題に苦悩していたゆえであった。

一高というエリートが集う学校に身を置いた若者が、同時代の青年たちの精神を己の心として、自己内部に潜む矛盾の解決のために野尻湖を訪れた。その生の苦悩とそれを克服しようという意志はその後の彼等に大きな影を落としている。出版人として、学者教育者として、また作家として近代日本を生きた知識人の野尻湖の意味を考えてみたいと思う。

### 岩波茂雄の野尻湖

岩波茂雄が、野尻湖の弁天島にひとりこもったのは明治36年7月。藤村操が日光華嚴ノ滝にその身を投じた約二か月後のことである。

岩波は明治12年に長野の諏訪で生れた。明治28年諏訪実科中学に入学。翌29年父を亡くし、家を相続して戸主となった。しかし東京遊学の夢を断ち切れず、明治32年4月、日本中学5年に編入した。翌33年この中学を卒業するが、一高の受験には失敗。明治34年9月、一高に入学した。そのときのことを岩波は「回顧三十年」のなかで次のように記している。（註4）

僕が十六のとき、諏訪の実科中学に入った翌年父を亡ひ、当初は非常に悲しく、半年位は茫然としてゐた。そのうち妙なことに慰められた。それは「身を立て道を行ひ名を後世に掲げ以て父母の名を顕はすは孝の終なり。」といふ言葉を知って、何か初めて世が明るくなり、それから勉強しようと思ひ立ったのがそもその動機であつたらうか。（中略）長男である僕が東京に遊学することは親戚の反対が予想されたので、

母と内証に打合せ、逃げるやうに郷里を発ったのは実科中学四年を卒へて、確か明治三十二年三月二十六日の未明だった。

一家の長として家を守らねばならない立場に置かれた岩波が、親戚の反対を予想し逃げるやうに東京に向かうのは、学問で身を立てたい、と願った思い、つまり立身出世思考があったためである。ところが岩波の一高時代は先に記したように新たな価値観の芽生えだした頃であった。当然の事ながら彼もその息吹の中に巻き込まれていくのである。そのことを「回顧三十年」の中では次のように記している。

それから二度目の受験で一高に入ったのだが、僕らの一高時代は謂ゆる人生の煩悶時代であって、当時同学だった藤村操君の死など、僕らに与へたショックは実に大なるものであった。ともかく皆がひたすら人生問題を探求してをった時代であり、内観、内省を重んじ、“自己に忠実なれ”と叫んだ時代だったので、藤村操君が華嚴の滝に身を投ずるや、“人生に信仰なきところ何か意味あらんや”といふ訳で、自分らは全く美に憧れ真理を探求する真剣味が足りないものであり、敗残者として生きてゐるのだとすら考へてゐたやうな頃だった。僕などは自ら身を断つ勇氣もなく、ただ自然が好きで晴耕雨読の生活を私かに憧れてゐた。

身を立てて「名を後世に掲げ」ることを目指し東京にやって来た岩波だが、「自己に忠実なれ」とする当時の青年達の息吹を真正面から受け、しかも藤村の死に直面したこととで自らの生き方に対して懐疑的になっている、その様子を知ることができるだろう。学問によつて身を立てるべく故郷を離れた岩波はその志半ばではやくも挫折した。

当時の一高といえば、全国からえりすぐりのエリートが集められ英才教育を受けていた所である。それだけに学生自身の自尊心やそれ以上に周りの期待は大きいものがあつたはずである。岩波の場合、その東京行きは母親の理解を得られたことで実現した。「誠実を教へた母」のなかで「長男である私には『百姓の家業を継ぐ』といふ重い責任と、強い習慣のしかかつてゐました」と東京に出る前の状況を回想している。岩波の身勝手が許されるはずもない。しかし「伯父を始め親類中がきつと反対することはわかりきつてゐる」岩波の東京行きを、岩波の母親は許してくれた。岩波の行ないと親類のはざまに立つ母親の苦しみを思いやりながらの岩波の旅立ちであつたのである。

岩波の東京行きあるいは一高生活というものは、母親への感謝とその期待に応えたいという思いが強くあつたであろう。自らの成功への野心、身内のものの期待に応えたいという現実がそこにはあつたはずである。

ところが岩波の願いとは裏腹に岩波の心の中には新しい意識が芽生えた。そして藤村の死に直面する。人間としての生き方、そのあるべき姿を模索し始めたとき、人生の理想と現実を知ったのではないだろうか。自らを「敗残者」と見なし、「晴耕雨読の生活」に憧れるという隠者的な生活を希求するのも、理想と現実のはざまに立ち身のおきどころが見付けられない岩波の苦悩ではないだろうか。

明治35年10月、岩波はトルストイ「わが懺悔」に出会う。その「感激」は「全く自分のために書かれたものだといふ感じであった。」と「回顧三十年」の中で記している。

トルストイの「信仰なきところに人生なし」の言葉を発見したときなど躍り上るほどの喜びだった。これは僕の思想上の一転機といへよう。人生問題は五十年で解決すべきではなく永遠の信仰によって初めて解決せねばならぬことを教へられ、ここに煩悶解決の緒口を得たやうに思はれてこれまでの暗黒世界から光明輝く世界に出たやうに感じられた。

しかし、岩波はこれにより信仰の道に進むわけではなかった。自らの人生問題の解決に様々な方策を考えていたことを感じさせるが、明治36年5月、藤村の死の二ヵ月後、野尻湖の弁天島に一人こもり孤独な生活のなかで自己を見つめ直す機会を得たのである。そのときの様子を岩波は後に「思い出の野尻湖」という一文の中で次のように記している。

死以外に安住の世界がないと知りながらも自殺しないのは真面目さが足りないからである、勇気が足りないからである、「神は愛なり」といふ、人間に自殺の特権が与へられてゐることがその証拠であるとまで厭世的な考へ方をしたものである。かかる感傷的な気分にかられたるが故に山色清浄なる境域に静思を求めたのであった。

自身の存在をどこに置くのか、その身の置きどころのなさに苦しんでいた岩波の様子を知ることができるだろう。「死以外に安住の世界がない」という性急なしかも「厭世的な考へ方」に至るのも、「人生問題」に苦しみ、自己を見失っている明かしであろう。その解決のために孤独を選び、その中からみずからの位置を探ろうとしたのが岩波の野尻湖行きだといえるのではなからうか。

安倍能成は岩波の明治36年夏期と記された自記「稿悦録」をもとに当時の岩波の様子をしるしているが、それによると安倍は岩波の手記によって「岩波の当時の心境を備さに知ることができた」らしい。(註5)さて、安倍の「岩波茂雄伝」によれば岩波の野尻湖行きの動機には恋愛の苦悩もあったようである。

さて島へ来た動機であるが、第一には彼が学年試験を抛棄して、進級の望みを失ひ、



近い周囲に口喧ましい親類近隣を持つ母に合はず顔もなかったことである。次には失恋である。失恋の事実は彼が私に語ったことによって明かだが、この自記の中ではそれを具体的に語っては居ない。しかし友をも離れてここへやって来たのが、失恋から来た人生への絶望を主原因としたことは、ほぼ推察に難くない。彼は島に着いた夜、「さびしさにたへかねて親しき友の名を呼びぬ。友は来らずして悽愴をますのみなるに、恐怖の情は死の懼るべきを以て更に我に迫りぬ。あはれ寂寥を求めて友を呼び、生を厭ふて死をおそる。人は矛盾の動物なる哉。弱きは人の心なる哉」（尙悦録）と告白して居るのは彼の真情であろう。さうして彼は島に居る間、当初の友と離れるといふ期待に反して、伊藤長七、上野直昭、樋口長衛、吉崎淳成（同室の一高生）、林久男、阿部次郎等と文通し、彼等から来た手紙をこの手記中に写し取って居る。伊藤は岩波の家との親しさから、母の苦衷を察して、学業を修めて早く世に出で、母親を一日も早く安心させることを勧め、阿部も法科大学へ進学することを勧告して居る。彼は何の為にこの島へ来たかと自問して、一言にしていれば「我」を知らん為だといひ、又慰めを得んが為だ、自由に人目を離れて泣かん為だともいって居る。実際彼はこの島に居て昼夜よく泣いたらしい。

岩波が野尻湖を訪れた動機を、学業の停滞と失恋にある、と安倍は記している。安倍によれば岩波が「学年試験を抛棄」し落第をしたのは、何らかの病気によるものらしい。学業の停滞がもたらす絶望と、失恋の苦しみの中、岩波の「身を立て」そして「名を後世に掲げ」という願いは挫折していくのである。その青年らしい野心は、しかし母親への恩返しでもあったはずである。一方では学問を修めることで立身出世を願い、他方では失恋に苦しみ、「自己に忠実なれ」という個人主義的風潮に影響を受ける、岩波のなかにある価値観の新しさと古さが、病気や失恋、また藤村の死などに直面したとき、その均衡したバランスを失い岩波を襲ったのではないか。それは岩波自身に自分自身の存在を見失わせてしまうものであり、現実の生を肯定できずにたたずむしかない岩波の姿がそこにあるのであろう。

ではこのように自己を見失った岩波にとって野尻湖とはいつたいどのようなところであったのだろうか。「思ひ出の野尻湖」には次のように記されている。

この（註、野尻湖周辺）景色のうちにあつて本を読むでもなく、何をするでもなく、鳥の声をきいたり雲の峰をながめて無念無想に暮したのである。だが空洞の生活でなく充実の生活であった。赤子が母の腕にねむる如き、自然の懷に抱かれた安らげき生

活であつた。自然を友とするとか、自然と同化するとかいふ言葉があるが、最も自然に接近し、天地の心にふれた生活であつた。自然は何時でも何処でも限りなく慰みを与へてくれ、決して愛する者の心に背くことはない。古人は「天地の悠悠を思ひ愴然として涙下る」といったが、私は左千夫の「寂しさの極みにたへて天地に寄する命をつくづくと思ふ」の歌を口ずさんで涙ぐむ心を、うれしくも有難くも思ふ。

野尻湖やその周囲の自然に抱かれて「充実の生活」を過ごした日々を岩波は回想している。市井にあって失恋などの対人関係や学校での生活のことなどに悩みつかれた心を癒してくれたそんな場所が野尻湖であつたのではなからうか。さらに安倍の「岩波茂雄伝」によればこの地での孤独な生活には、「『我』を知らん為だ」という思いもあつた。希望を抱いて出て来た東京での生活という現実のなかで失ってしまった、あるいはそのあまりにも激しい時代の流れのなかで見失ってしまった自己という存在を見据える、そんな思いもあつたのではなからうか。しかし安倍によれば野尻湖での生活はまだ岩波にとってすべての解決にはならなかつたようである。

彼は「島を出づるの辞」の中に「ああ世に光を認めず、生存の意義を知らざるも、余は暫らく母の愛の俘となりて苦しき生をつづけざるを得ず、学を修めん望なきも学を励まざるを得ず、向陵の地はうれしからざるも再び踏まざるべからず」とかき、又「芙蓉湖（註、野尻湖）上月余の閑生活によりて、余は愛と信仰と希望との尊きを知りぬ。余は之を得て初めて人生の真趣を知り得べしと思へり。されど絶望の淵に沈みし我は果して此の三者を追求する気力を出し得るや」と疑ひ、また「ああ何の日にか常住の光明を得て、涙の谷以外に此世あるを知らむ？」とも嘆いて居る。更に十月以降の「秋風録」には「余の目下要求するは人生問題の解決にもあらず人生の真義を知らせんとにもあらず。只、我慰藉を得て我感情を癒さんことなり」と告白して居る。望を失ひ切つたのではないが、光明と安心とは未だ彼に臨まなかつたことを覗ふに足りる。

しかし、岩波はこの野尻湖での生活について、のちにいろいろな回想の中でその思い出を記しており、安倍の言うようにその当時は「光明と安心とは未だ彼に臨まなかつた」にしても、岩波にとってその後の人生に大きな何かを残した体験であつたにちがいない。安倍はこの野尻湖での体験の意味を、次のように記している。

この野尻湖の四十日の彼の多涙多情の跡を見て、なほ彼の生きんとする意志と体力との強いことを認めざるを得ない。彼は生を終るまで一定の信仰を得なかつたといつて



居る。しかし彼は彼の性格と信念と本能とによって、絶えず生を肯定して積極的に生き、考へるよりも直感して活動し、自己の信念に従って社会的に活潑に行動した。その素地を作った一時期、一契機として、この島の生活の重要なことを認識しないでは居られない。

安倍のこうした見方は正鵠を得た捉え方だと思う。岩波が野尻湖の島で一人、孤独を守り生活をしたことは、人生の意義を立身出世と捉え学業で身を立てること願う理想と挫折により知ることとなる現実、あるいは「自己に忠実なれ」という極めて個人主義的な思潮により抱く学問という幻想に対する懐疑、青年期に感ずる恋愛とその挫折、それによる絶望など、だれしものが持つであろう青年期特有の純粋な理想と現実の相克や矛盾をいかに融和させるか、様々な矛盾の中で苦しむ自分という存在とは何かという問い掛けだったのであろう。この野尻湖での生活を岩波は次のように回想している。

風雨はげしき故舟の出ないといふのを、無理に頼んできたとのことである。母は自分の世を捨てる不心得を懇々とさとし、遂に一夜を語り明かした。島に於ける私の生活は四十日も続いて少しも飽くことを知らなかったが、母の切なるいましめに従ひ、心ならずも再び都に出て学業に就くことにした。島を去る時には、この愛著の地と別れるを惜んで、限りなく泣けて涙をとめることが出来なかった。野尻の夏は一生涯忘れ難き思ひ出である。

母親の言葉を聞き入れた岩波は、野尻湖を出てまた東京での学業を続けることになる。しかし結局は一高を中退することになる。（註6）岩波は「回想二題」のなかでみずからの一高時代について記している。

こんな調子で私の向陵生活は憧憬より失望へ、失望より人生悲観へ、それから卒業もしなくて中途学校を去るやうな惨敗の歴史であった。しかし三十年の昔をかへりみて一番懐しくまた意義のあったのはこの時代であると思はざるを得ない。（中略）この時代が私の人間の根底に何物かを与へてくれたことは疑ふべからざる事実である。

岩波の野尻湖でのその生活と意味は、一高時代に抱いた「憧憬より失望へ、失望より人生悲観へ」という大きな転換期の中、岩波自身の存在を認識させたところであり、「自己の信念に従って」行動した岩波の人間形成に大きな影を落としているのである。

#### 安倍能成の野尻湖

安倍能成は、明治16年12月、愛媛松山に生れた。一高に入学するのは明治35年9月、同期には藤村操、小宮豊隆、野上豊一郎、尾崎放哉、山田又吉、江木定男、中勘助らがいた。岩波は一年先輩になるが翌年留年し同級となった。

この安倍も岩波同様に藤村の自死の影響を強く受けたのである。(註7)

高校一年までの間はまあ級中の秀才であったが、一年の末に級友藤村操の日光華厳滝投身といふ事件に遭遇して、非常なショックを受け、人生の根本問題をよそにして、試験にあくせくするのは、うそだといふ気になり、元来が試験には疎いたちだったことも助けて、二年になって忽ち落第してしまった。(中略)しかし人生問題が如何に大事だといっても、だんだん一高生の頭脳の良いのに比べて、自分の低脳が悲観されて来て、一高の後の二年、三年の頃それから大学時代にかけては、一ばんさういふ点に於いて、自己を悲観した時代であった。

当時の一高は先程簡単に記したが「一高に学んだ者が天下の秀才即ちエリートを以て任じ、世の自信ある青年の中に志を立てて一高を目がけ、困難な入学試験を突破し得た誇を抱いて、おのづから国家の重きに任ずる自負を存し」えたところだった、と安倍は回想している。しかし岩波同様にそのエリート集団の中で様々な苦悩を安倍もまた感じていたようだ。

明治37年2月に日露戦争が始まった。日清戦争の頃には「軍艦の噸数や速力まですっかり覚えた」と記す愛国少年だった安倍はもうその頃には「トルストイの非戦論に共鳴するやうにな」っていた。

「日露戦争」は日本の資本主義形成に与かることも多かつたらうが、単なる国家主義軍国主義に対して、少数の青年が個人主義的思想に感激して、自己への忠実を第一とし、自己内心の声に聴かんとした時代であり、時代を感ずることの鋭敏な一高生の中に、在来の校風論、籠城主義の批判が台頭して来たのも、当然必然の趨勢であり、私は主として魚住(折蘆)に動かされて、この傾向を代表する役目を買ふやうになった(略)

安倍が日露戦争前後にこのような思いを抱いていたことは、国家主義的な思考から個人主義へと傾斜を強めていた当時の青年たちの新たな価値観の台頭と進展を意味するものであろう。しかしながら新たな価値観の芽生えはそれまでの価値観との間に重大な齟齬を生み、そこに矛盾や対立が生じる結果になったのではないだろうか。安倍はこうした時代の意識の変化の中で、「中庸よりも極端に徹底せんことを求め、定められたる事よりも自己

内心の要求に従はうと宣言して、学業を抛擲し、試験を無視したことが、三十七年の学年試験の落第となった」と回想している。

明治38年8月、安倍は自身の大きな転換期を迎えたなか、野尻湖に向かうのである。安倍は岩波から野尻湖での体験を聞かされたことで、孤独な島での生活に対する憧れを抱いていたようである。安倍の記した「野尻湖日記」にはそのときの心境を次のように記している。(註8)

何の為にわざわざ山奥の湖の人住まぬ小島へ行くといはれたなら、自分は答へることが出来ぬ。唯だ行きたいから行くのだといふ外はない。

加えて後に記した「我が生ひ立ち」のなかで、このときの心境を回想しこの一文を引用いたうで「と書いて居るのは、正直な告白である。私は孤独を求めてここへ来た。」と記しているのは、東京での生活における矛盾や藤村の死、また日露戦争などの影響から見失ってしまった自己の姿を見定めてみたいという心の表われではなかったろうか。

さて安倍の記した「野尻湖日記」は、彼自身が後に言うように「独創的なところもないが、忠実に丹念にその日その日の印象をしるした」ものである。しかし、日常の単なる生活記録の端々に表われる安倍の感想には、野尻湖を取り巻く自然の中で自己を内省、内観している様子を窺い知ることができる。

安倍は野尻湖に行くことを、次のように記している。

八月の初めに愈出かけることになった。I君からは「人生に対する大いなる信仰を得る為に、人なき島に大いなる悲哀を味へ」といふ意味のことをいって来た。(中略)しかし自分には何の為に行くのかは、やっぱり分からぬ。唯自分は寂しい、人の居ない所へ行きたい。そして何にもかまはず、天地の前にひとりで泣いて見たい、涙の尽きるまで泣いて見たい。叫んで見たい。総身の打振ふ程凄く恐ろしい心持がして見たい。

孤独を望み、人目を気にすることなく過ごしたいという願いが表われているだろう。さらに

火をともして楚辞を出して、東皇太一、雲中君、湘君や絶筆の懐沙賦を読む。懐沙の終りに、世溷濁、莫吾知、人心不可謂兮、知死不可讓、願勿愛兮とある。哀切胸に迫るの感がある。自殺者の心事、永き恋、すねた人生観、人生を茶かした態度など、色々のことをゴチャゴチャに考えた。

とある。「楚辞」の「懐沙」とは、中国・戦国時代の楚国の政治家、屈原が、讒言をされ

て失脚をし、政治の表舞台から離れていた際詠んだものだという。屈原が孤独のなか世を思い、いまだ志を強く持ちながら死を見つめる様子に、安倍は、時流に飲み込まれ様々な価値観に翻弄されている自己の現実を重ねあわせていたのかもしれない。あるいは、

今日思った。人は主張すべきのみ、弁解は要らない事である。主張とは自家の真を枉げざることである。嘗々として自他に弁解して居る自分は陋なる哉。

などと、これまでの自分自身や自己を取り巻く様々な周囲のものにまで思いをめぐらせているのは、自己の姿を、己の弱さを認めたからではなかろうか。

安倍のこの野尻湖での孤独な生活は、己の姿を見据え、その姿をとらえるという意味で必要な時であったと思われる。なお、安倍の回想によると、彼もまたこの時期に失恋をしたようである。

安倍もまた岩波同様に等身大の自己を、その存在を模索していたのであろう。

### 中勘助の野尻湖

中勘助が野尻湖を訪れ、「島守」として弁天島にこもるのは明治44年と45年（大正元年）の二夏のことである。すでに大学を卒業し、27才の時であった。岩波や安倍が野尻湖に赴くのが二十歳前後の事だから中の二度にわたる島での生活は随分と遅い。

中は、明治18年東京で生まれた。明治35年一高に入学、先にも記したように安倍や藤村とは同期である。

すでに再三にわたって述べてきたように、藤村の自死について岩波や安倍はその事件と衝撃について記しているが、渡辺外喜三郎氏の指摘にもあるように、中は具体的には何ら書き残してはいないようである。（註9）藤村本人、あるいはその死について中がどのような思いを抱いていたのかは、今のところはっきりとはしない。しかし、中も岩波や安倍同様に一高時代様々な苦悩に直面していたようである。「あのころ」と題された当時の思い出を引いて見よう。（註10）

その頃の高等学校の入学試験は長い学生生活中的殆ど唯一の難関、仰山にいへば人生の登龍門だった。（中略）そこでいい気持ちに自分免許で一高の健児と称して未来の日本を背負ったやうな気になる。（中略）少し熱にうかされたみたいに天下国家など論じてゐる。（中略）私は性格的に所謂一高式にはなれなかったが一高かぶれをしないではなく、夕食後大道狭しと横隊になって本郷通りを傍若無人に寮歌を歌って歩く彼

らの仲間に入りもした。二年から三年へかけてだったらう、日露戦争があった。その宣戦布告のあった際の私共の気持はなんともいひやうがない。誰しもいつかは来ると思ひ、遠からずくると思ひ、来ねばならぬと思つた事ながらその瞬間磐石が頭上に落ちかかった思ひだった。一般の緊張、文字どほりの挙国一致は第二次世界戦争の際のその比ではなかつたらう。既にそのまへの思想的動揺？から学業に身が入らなかつた私共はこの国運を賭けた戦争の衝撃によって一層懶け者になつたらしい。幸にして戦争は辛うじて勝つた。が、当然にも続いて深酷な経済的不安がきた。その救はれ難い慢性的憂鬱のうちに私共は学校生活ををへることになった。

日露戦争前後の青年たちが受けた影響を中もまた受けていたことがわかるであろう。岩波や安倍は「人生問題」と記し、中は「思想的動揺？」と記しているが、同じ空気のなかその時代の拘束を受けていた。さきの引用の続き。

一高三年のあひだに私は或は明るい、或は暗い、或は楽しい、或は辛い種種の体験を新にした。それは若く未経験な頭脳に鋭く深く刻まれた。私は学校をよさうと思つたり、家を出ようと思つたり、死を願つたりした。しかしそのいづれをも決行せず表面平凡な学生生活を続け了つたのは自分の怯懦や不決断よりも貴い友人と姉の真心こめた精神上の支援のお蔭だと思ふ。当時の生活は私にとっては人生の再出発の感があった。にもかかはらず一般の同窓からは私は極めて気楽な、快活な、酒好きの懶け者と見られてたらしい。

中にもまた危機があつたのである。岩波や安倍と同様に時代の息吹をうけていたのだ。ただ中にとって幸運だつたのは、友人の山田又吉や「蜜蜂」の主人公、兄嫁の末子の存在があつた。後に中は記すが、この二人に対する感謝の思ひは終生変わらないものとなる。

中は岩波や安倍のように、この時代の影響を受けて、落第をしたりまた島にこもることなく無事に学校を卒業する。ところが、明治39年に父、勘弥が亡くなり、さらに明治42年、大学を卒業する直前に兄、金一が脳溢血で倒れ、痴呆化してしまつた。金一は、中とは14歳の年の差があるが、東京帝大医学部助手の立場で、ドイツに留学。帰国後新設された福岡医科大（九州帝大医学部の前身）内科学第二講座の教授となつた。先に引用した藤村の死を巡る安倍の回想にある「当時に於いて最上の名誉とされた大学教授」に34歳の若さでなつた。まさに明治のエリートであり、立身出世を地で行くような人である。

ところがこの兄の発病によってその後の中の生活が一変してしまふ。

亡くなつた姉の父の不幸のことで福岡から上京した兄は帰る前の晩親戚の者と元気よ

く酒をのんだ。が、翌朝来客があつて呼び起され二階からおりてきて茶の間に坐つたまま黙り込んでしまった。失語症！ その時から兄は癱人だった。（「遺品」）

金一が発病したことで、中家では家の存続、経営の問題などが起こってきた。ところがこの二人の兄弟は勘助が幼い頃より仲が悪く、二人の不仲を心配した父、勘弥は勘助のために家作などを残していたらしい。兄の世話にならずとも良いようにという配慮であろうか。しかし、中はいやおうなしに家をめぐらるる問題に巻き込まれて行くことになる。中の回想によれば、この兄弟の不仲は決定的なものとなり、対立は深刻化した。

大学卒業後私は近衛に入隊し、病んで衛戍病院に入り、除隊になつても家へは帰らず親戚の家から病後の保養のため、一つには住むところがないためにもその頃は知る人もない僻村だった野尻へいった。家人との義絶であり、流浪である。（「瑠璃鳥」）

明治42年、中は大学を卒業後、急性腎臓炎のため入院。翌43年一年志願兵として、近衛歩兵第四連隊に入隊。しかし44年4月、衛戍病院に入院。二か月後除隊をし、姉の嫁ぎ先で静養後、野尻湖に向かうのである。

この間、兄嫁の末子は、中をなんとか中家の経営に参加させるべく、努力をしていたらしい。しかし金一と中の対立は深刻で、そのはざままで苦しんだのがこの兄嫁であったことを、後に中は記している。

中は翌45年（大正元年）にも野尻湖を訪れた。この時は、中家をめぐらるる問題が一応の決着を見せたためである。大学卒業後、中は職に就かなかつたが、そのことを気にしていた金一の申し出に応えたものらしい。そこで中は執筆によりの収入を得ることにした。これが「銀の匙」の制作の由来であることを後に中は回想している。（註11）しかし中によれば入隊前の病床ですでに記憶をたよりに思い出を書き溜めていたらしい。したがって野尻湖畔の石田家にてそれらの素材を元に「銀の匙」をまとめたようである。

「銀の匙」は、小説とはいえ中の幼少期からの思い出がその素材となっている。このことには意味があるように思われる。おそらく中はこの野尻湖畔において自らの過去と現在を見つめていたにちがいない。「家人との義絶であり、流浪である」と後に回想させた、それほど思いを当時の中は有していた。兄と対立をし、「家人との義絶」を思う現在とは何かを知るために、中は自らの過去を振り返るのである。過去の自身を探ることは現在の自己の存在そのものを認知するきっかけになるだろう。過去から現在への架橋を丹念にたどることで、中は自己の存在を確認しようとしていたのではないだろうか。

こうした意識を中が有していたとするならば、藤村の死を一つのきっかけに、日露戦争



前後に青年たちに襲いかかった「人生問題」に苦悩した岩波や安倍が自身の心を「内省、内観」するために野尻湖を訪れたことにそれは通じるものがあるだろう。中にとっても野尻湖は等身大の己の姿を認知するために必要な場所であったと言えるのではないだろうか。

ところで安倍と同様に中もこの野尻湖弁天島での生活体験を日記体随筆としてまとめている。

「島守」 孤独に堪へないやうに病み疲れた心ゆゑにそれだけ一層孤独を願って島籠りをした時の作品。二夏のもの初めのを土台にして一つに纏めてある。文字どほり独りの生活は内部的にも外部的にも何か全くちがったものを感じさせる。(註12)

明治44年9月23日から同10月17日の日録を基調として成立した「島守」は、島での日常生活と、目に映る自然の様々な彩りを記したものである。しかし、坦々とした日常の営みや、島をとりまく自然をかきとめるなかに、自己をみつめる中自身の姿が見えかくれているようだ。

南風の強くふく日私は手桶をさげて北浦の水を汲みにいった。いつものやうにじっと足もとを見つめて思ひに沈みながらしづかに小暗い坂道をおりてゆく。大木の枝はいくへにも頭上を蔽うて空とぶ鳥もこの姿を見ないであらう。(中略)崖の樹木は水をすふ化鳥の形に押し合つて青暗い淵のうへに頸をのばしてゐる。ふと見れば汀からのりだした朴の木の枝にひとりの女が腰をかけて一心に釣をしてゐる。翠の髪を肩になびけ、瑠璃の翼を背にたたみ、泛子をみつめる瞳はつぶらかに玉のごとく、ゆさりと垂れた左右の脛は珊瑚を刻んだかとうたがふ。みづはか、山姫か、奇しく妙なる姿は底なしの淵の底までも照してゐる。私はおぼえずよろめいて手にした桶をとり落した彼女は驚いて口笛のやうな叫び声をあげ浦づたひに島をまはって龍宮の岬のほうへ飛んでいった。そのあとに私は温もつた朴の枝に頬をおしつけ恍惚として影もない水を眺めてゐた。夕べもまたず冷えてゆく朴の枝が教へるであろう、無慈悲な鉤に捕へられたのは淵にすむ鱒の子ではなくて私みづからであったことを。

夢とも現ともつかぬ幻想的な描写のうちに、何時でも飛び去ることのできる<彼女>にくらべ、この島で独り孤独な生活をしなければならない運命という「無慈悲な鉤に捕へられた」自身の現実を、中は意識しているのかもしれない。中は、「島守」の冒頭部分でこの現実について次のように記している。

こんな島のなかにゐてなにをするのか、寂しくはないか、恐しくはないか……これらの問ひに対して私はなんと答へたらよいであらうか。住むべき家もないゆゑ鴨のやう

に迷ってきてこの島に宿をもとめたのである。寂しいといへば都会の喧噪のうちにすこしの理解もない人びとの群にまじってるよりも寂しいことがあろうか。ここは湖の離れ島である。さりながら日月は追ひあふ水鳥のごとくにして朝夕に島を照して忘れることはない。私はこれらの木や、鳥や、虫や、魚やと友となり、兄弟となって美しい姉妹の神を送り迎へてゐる。私は今ひとりになって世のさかしらな人びとに愚かな己の姿を見る苦しみからのがれ、またいかに人間はつまらぬ交渉をつづけんがために無益に煩はされてるかを知った。世のあさましいことは見つくしまたしつくした。今はただ暫しなりとも清浄な安息を得たいと思ふ。

中は、家の問題を契機として人間存在の空しさ、愚かしさを見いだした。そして自分が理解されない現実に、孤独な「己の姿」を認めたのである。

中勘助の二夏にわたる野尻湖での生活体験は、大いに意味深いものであったにちがいない。家人との対立のなかでよりどころのない寂しさを感じ、孤独な「己の姿」を見いだした。それは、自己存在の根本的な追求へとつながる。自身の過去を素材とした「銀の匙」がこの野尻湖で纏められたことは、その執筆理由の如何を問わず、中自身の存在の原点を探ろうとする中の意識に関わっているだろう。

二十歳前後の岩波や安倍が様々な「人生問題」に苦しみ、己自身の姿を見いだすために野尻湖で孤独な生活をした。二十代半ばを過ぎた中も彼らと同じように野尻湖での孤独な生活のなか、「己の姿」を見つめるのである。そしてこのことは中勘助という人もまた明治30年代後半、日露戦争期に青年期を迎えた人たちが多かれ少なかれ影響されたであろう「人生問題」の波紋や藤村の自死のショックの影響下にあったことを物語ることになる。

#### おわりに——一つの明治の精神——

中勘助が二度目の島籠りをした明治45年の夏、明治天皇が崩御した。そしてその大喪の当日、乃木希典・静子夫妻が殉死した。その理由は乃木が明治10年、西南戦争に従軍したさいに軍旗を失ったことにはじまる。その時自決を覚悟するも諫められ、爾来35年あまりの月日を明治という時代とともに生きることになる。

しかし、この乃木夫妻の殉死は明治の終焉とともに人びとに大きな衝撃をあたえた。

乃木同様に軍人でもあった森鷗外は、殉死を取り扱った歴史小説「興津弥五右衛門の遺

書」をこの事件の直後に脱稿している。「歴史に仮装した乃木希典への鎮魂曲であった」という三好行雄の指摘（註13）のように、明治という時代を生き、しかも同じ軍人である鷗外なりの衝撃が、そこにある。

よく言われるように夏目漱石もまたこの乃木夫妻の死を明治という時代の枠組の中でとらえている。「こころ」という小説の中で「先生」とよばれる主人公の「私」が明治天皇の崩御を一つの時代の終焉としてとらえている場面である。（註14）

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったやうな気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残ってゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。

さらに漱石は「先生」に乃木の死について自問させている。

私はさういふ人にとって、生きてゐた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、何方が苦しいだろうと考へました。

乃木は西南戦争で軍旗を失うという過失を胸に秘め、三十五年という月日を生き、このことは友人を死に追いやったと過失を感じている主人公に大きな影響をあたえた。

友人を死に追いやったという過失を感じている主人公にとって乃木の死は「最も強く明治の影響を受けた」主人公に「明治の精神に殉死」するという決意をもたらすのである。

一つの時代の終焉がこれほどまでに大きな波紋を投げかけたのは、明治という時代のもつ様々な価値や意味を包含するその重層性をあらためて感じさせる。が、一方で明治がきわめて強く大きなナショナリズムにつき動かされていた時代であったことも「こころ」のこの主人公の言葉は物語るものであろう。

「こころ」には、この「先生」を回想する「私」というもう一人の主人公がいるが、「先生」はこの大学生である「私」に対しその世代的なちがいをよく口にするようである。自分の世代を「最も強く明治の影響を受けた私ども」という認識もそうだし、また、

私の暗いといふのは、固より倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。又倫理的に育てられた男です。其倫理上の考は、今の若い人と大分違った所があるかも知れません。

というふうに人間関係や秩序を構築する道徳上の考え方そのものについても、その認識のずれを意識しているようである。あるいは「先生」が自らの、そして自殺してしまう友人のKの学生時代を語る場面では、その時代を次のように述べている。

其頃は覚醒とか新しい生活とかいふ文字のまだない時分でした。しかしKが古い自

分をさらりと投げ出して、一意に新しい方角へ走り出さなかったのは、現代人の考へが彼に缺けてゐたからではないのです。

「覚醒とか新しい生活」という言葉がどれほどの意味を持つのか、良くは分からない。ただ、「先生」やKの学生時代の意識や気質にはなかった「覚醒とか新しい生活」という人間生活のスタイルに関わる言葉にはきわめて個人的な指向を認めることができるのではないか。だとすれば、そこには「先生」やKの世代と「私」の世代との断絶を意識している「先生」の認識があり、個人的なものを指向する若い世代の新しさに対して、そうしたものに移行できなかつた自分たちの古さを意識したものであると言えるのではないだろうか。

おそらく親と子ほどの年の差はないだろうと思われるこの二人の関係でこれほどの違いを意識させられることにも、明治の持つ重層的な時代意識を感じるのである。

「こころ」という作品におけるこの二人の登場人物の造形の仕方に見られる世代というものがありかたに、明治のもつその時代の連続的なものとそうではないものをパースペクティブにとらえている漱石自身の時代認識があると言えるのではなからうか。

漱石は「思ひ出す事など」のなかで「自我を主張」する当時の青年たちについて次のような分析をしている。(註15)

今の青年は、筆を執っても、口を開いても、身を動かしても、悉く「自我の主張」を根本義にしてゐる。夫程世の中は切り詰められたのである。夫程世の中は今の青年を虐待してゐるのである。「自我の主張」を正面から承れば、小憎しい申し分が多い。けれども彼等をして此「自我の主張」を敢てして憚かる所なき迄に押し詰めたものは今の世間である。ことに今の経済事情である。「自我の主張」の裏には、首を縊ったり身を投げたりすると同程度に悲惨な煩悶が含まれてゐる。ニーチェは弱い男であつた。多病人人であつた。又孤独な書生であつた。さうしてザラツストラは斯の如く叫んだのである。

「こころ」における若い世代の「私」には、「自我の主張」を声高に唱えるようなところはない。しかし、「先生」は自らの世代と「私」の世代との間にある違いを認識していた。この位相こそ実は明治という時代の持つ様々な連続と非連続のダイナミズムであり、新旧の価値観の併存状態や矛盾などに彩られたカオスの象徴である、と言えるのではなからうか。同じ時代に生きながら「先生」は「私」に対し「最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちまし

た。」と告白するのも、時代の性急なしかも混沌とした流れに飲込まれてしまった人間の悲劇であり、時代や社会を彩る様々な価値観を受け止めなければならない人間の宿命を物語るものである、と言えるだろう。

「こころ」は大正3年4月から8月まで朝日新聞に連載された。さらに同年9月、自費出版の形で、岩波書店から出版される。これは古本屋として出発した岩波茂雄の初めての出版物とっていいものであった。

すべに述べてきたように、岩波、安倍、中の一高、それから大学の時代は個人主義的な風潮が強まるなかで、藤村操の死、日露戦争の開戦、また中の回想にある戦後の「深酷な経済的不安」の影響など、個人的にも、社会的にも様々な衝撃をうけた時代であった。しかも一高というエリートの集団のなかで英才教育をうけながら、自己の能力や教育そのものに対して懐疑的な風潮も生まれた時期であった。明治5年に公布された学制は教育の中央集権化という制度的な整備とともに、先に引用した安倍の言にもあるとおり、西欧列強の外圧に対処するために教育を近代化することで国家に有為な人材を育成するという目的があっただろう。いわゆる帝大はその頂点であり、一高その他の旧制高校は、中の言うとおり「人生の登龍門」だったのである。したがってこの門に到達した者たちが抱いたであろう自負心は大変なものであったはずである。学校を出て社会にそれ相応の地位を得る。そうした立身出世への思いは、学校教育の中、上級の学校に進んだ多くの若者に共通する野心だったはずである。先に引用したように岩波が上京し一高に進学するのも当時の青年たちに共通する野心のあらわれであった、と思われる。

ところが、岩波、安倍や中の一高時代は既に述べているように青年たちの意識や価値観の過渡期を迎えた時だったのである。岩波の「思ひ出の野尻湖」によれば、

その頃は憂国の志士を以て任ずる書生が「乃公出でずんば蒼生いかんせん」といったやうな、慷慨悲憤の時代の後をうけて人生とは何ぞや、我は何処より来りて何処へ行く、といふやうなことを問題とする内観的煩悶時代でもあった。立身出世、功名富貴が如き言葉は男子として口にするを恥ぢ、永遠の生命をつかみ人生の根本義に徹するためには死も厭はずといふ時代であった。

というように強いナショナリズムと個人主義的な意識の台頭という矛盾する価値観のなかにいたのである。こうした矛盾のなか、岩波たちは苦悩する。そして自己の姿や心のうちを探るべく腐心したのである。岩波や安倍の野尻湖行きにはこうした時代の反映があるのだと思われる。「永遠の生命をつかみ人生の根本義に徹するために」自分自身の内面を見

つめる、そうした青年たちが岩波たちの世代だといえよう。

そう考えると、漱石の「こころ」が岩波書店から刊行されたことには、実は大きな意味があるのではなかろうか。

言うまでもなく、漱石は多くの若者たちに取り巻かれていた。漱石と彼らとの関わりは様々なものがあつた。古くは寺田寅彦のように、熊本五高時代からや、安倍や中のように一高・東京帝大での教師と教え子という関係。あるいは作家と読者という関係など、いろいろである。おそらく漱石は彼らの問題を見つめていたに違いない。

岩波、安倍、中の3人のなかで、最もよく漱石の許に出入りをしていたのは安倍であろう。安倍が「ホトトギス」に「野尻湖日記」を発表するのが、明治42年1月。漱石は十分に岩波や安倍、あるいは中の野尻湖体験を知っていたといえよう。つまり自己の内面を誠実に模索していた若者の姿を認めていたと思われる。(註16)

漱石は、「こころ」の刊行にあたり次のような広告文を残している。

自己の心を捕へんと欲する人々に、人間の心を捕へ得たる此作物を奨む。

岩波が明治36年8月、野尻湖を訪れたのはまさに自己自身を探るためであつた。まさに「自己の心を捕へんと欲する」ためだったのである。その岩波のところから「こころ」は出版された。これは単なる偶然だったのであろうか。

学業、国家、両親、世間、友人、立身出世、恋愛、時代そして生と死など若者を取り巻く様々な問題が「こころ」にはある。それらの問題は、彼らにとって決して人ごとではなかつた。「こころ」は、時代に翻弄され、人として生きていく意味を問いつけた彼らの世代に対する、漱石なりのメッセージだったと言えるのかもしれない。

岩波茂雄、安倍能成、中勘助のそれぞれの野尻湖をみていくと、そこに見え隠れする明治という時代の持つ重層的な面を感じないわけには行かなかつた。古い明治と新しい明治の矛盾、撞着は彼らに死を思わせるほどの深い苦しみを与えた。生きることの意味さえ失わせてしまった様々な価値観の急速な展開は、彼らを翻弄し、彼ら自身の姿や心さえ見失わせてしまったようである。ましてや一高というエリートの集団の中、若さからくる自意識の高揚や青年期特有の高邁な理想が、彼らの自負心や自尊心を大きく膨らませていたにちがいない。しかし彼らの希望を願いをあざ笑うかのように時代は彼らに様々な十字架を背負わせたのである。いずれは国家、社会のために有為の士となるはずの一高生、藤村操の死は立身出世を意識していた青年たちに、学業やそれを続けることの意味を改めて考えさせたと言えるだろう。さらに日露戦争では、ナショナリズムで彩られるなか戦争そのも



のに対する懐疑が生じるなど、国家や社会への帰属という価値観とは違うものを感じることになる。

岩波たちの一高時代は、こうした時代の大きな転換点だったのである。様々な矛盾や撞着をそのままに受け止めなければならない時期だった。

野尻湖の悠久な自然の中での岩波や安倍そして中の孤独な生活とその体験は、三者三様のものではちがいない。しかしそこで認めた自己というどうにもならない現実、彼らのその後に大きな影を落としている。

後に、岩波が「私の四十年來の経験から考へまして、為す可きと思つたことは必ず可能になつた」と後輩の一高生に語つた言葉も、また中が「求道者」であらんとし、「完成向上」を求め続けた意識も、ともに様々な矛盾の中で生きていかなければならない現実を悟り、自らの意志の力でそれらを克服しようとしたところから生まれた認識だと言えらう。こうした彼らなりの理想を完遂させようとする意識は、明治という時代の重層性が生みだした一つの精神だったのである。そしてその理想を追求する意志的な精神はナショナリズムに彩られた「明治の精神」ではない、新旧の価値観の対立と齟齬という矛盾のなかから生みだされたもうひとつの「明治の精神」であるといえるのかもしれない。

註1『我が生ひ立ち』（昭和41・11 岩波書店刊）

2『山田又吉遺稿』（大正5・3 岩波書店刊 非売品 編集は岩波茂雄・安倍能成・中勘助）。山田は大正2年3月29日、東京小石川にて自殺をした。安倍の回想によれば山田は病気のため大学を卒業するのが2年遅れ、明治43年7月に卒業した。また、自殺を遂げたところは新婚の安倍の留守宅だったという。（『我が生ひ立ち』）

3「自伝」ならびに書簡本文は『折蘆書簡集』（昭和52・6 岩波書店刊）

4『茂雄遺文抄』（昭和27・4 岩波書店刊 非売品 編集は安倍能成）なお岩波からの言及はすべてこれによる。

5『岩波茂雄伝』（昭和32・12 岩波書店刊）

6明治38年9月 岩波は東京帝国大学哲学科選科に入学。

7「中勘助の死」本文は『涓涓集』（昭和43・6 岩波書店刊）

8「心」（昭和45・11）に遺稿として掲載。

9「古典文学・近代文学 作家の謎事典」（昭和61・9「国文学」学燈社）

- 10中勘助からの引用はすべて『中勘助全集』全17巻（平成1・9～3・3 岩波書店刊）を使用。
- 11中と兄、金一の対立は、金一の正常時からのもので中の就職問題が直接の問題ではないらしい。
- 12『中勘助全集』第2巻「あとがき」（昭和36・1 角川書店刊）
- 13「<歴史>への端緒」本文は『鷗外と漱石—明治のエートス—』（昭和58・5 力富書房刊）
- 14本文は『漱石全集』第6巻（昭和60・3 岩波書店刊）
- 15明治43年10月から翌44年4月にかけて発表。本文は『漱石全集』第8巻（昭和60・5 岩波書店刊）
- 16大正元年9月9日付野尻湖畔に滞在していた中勘助にあてた葉書が残されていた。「御手紙拝見 いつの間に旅行をしましたか。私も信州の北の方へ行って少し居ました軽井沢を通るとき野上を尋ねやうと思つて果しませんでした。君の居る所はどの見当ですか、何でそんな寒い所にあるのです。東京もいい気候になりました。早く御帰りなさい」（『漱石全集』第15巻 昭和60・12 岩波書店刊）

（いちかわ ひろあき／湘南医療福祉専門学校講師）